

Title	『管子』地員篇の山と丘陵地帯
Sub Title	The mountains and hilly area mentioned in Guan-zi (管子) XIX 58 Di Yuan (地員)
Author	原, 宗子(Hara, Motoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1993
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.1/2 (1993. 8) ,p.31- 68
JaLC DOI	
Abstract	Where is the area mentioned in Guan-zi (管子)Di Yuan (地員)? This problem is still in dispute, xia Wei Ying (夏緯瑛) advocated, it was northern China, especially the Huang he (黄河) basin, except Guan zhong (関中).On the contrary, You YU (友于), Wane Da (王達), and others argued, it was Guan zhong. But in the argumentation, these theories, lacking concrete evidence on the meanings of the names of hills and mountains mentioned in Di Yuan, have remained theories. This paper analyzes them as follows; [table] The surveying point of the level of underground water should not be at the top of the hills/mountains, but the foot, where men could dwell. Then, these landform can be seen only in Shandong (山東) province in China. There also can be seen so many toponyms, similar to the name of hills and mountains in Di Yuan, in Shandong (山東). As a result of the analysis, it is thought that Di Yuan might describe the situation in Shantong.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930800-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『管子』地員篇の山と丘陵地帯

原 宗 子

一 問題の所在

古代中国の諸文献の中で、『管子』地員篇は、土壤分類に関して最も詳細な記述のある文章だと云えよう。土壤を地下水位に従って序列する前半部、その理化学的性質に基づく生産性を指標に叙述する後半部、ともに各土壤の植生・適性植物を記し、牧畜・水産業、さらには個々の土地に生活する人々の風俗にまでも、土壤の影響を認めてコメントを加えている文献である。この地員篇については、既に若干の私見を公けにしてきたが、本稿においては、そのような植生等の記載が無く、もっぱら地下水位別に土地名を並べただけであるかに見える、地員篇の中では少々特殊な十五ヶ条について、検討を加えてみたい。

まずはその原文を①～⑮に分節し、前後に位置する文章も若干添えて掲げる。なお、既発表の拙稿との関連性を示すため、この十五ヶ条の前後に関する主な私見を表Iにまとめ、表中の符号を、引用原文に付す。

○ 夫管仲之匡天下也、其施七尺。

A 瀆田悉徙、五種無不宜。其立后而手實。其木宜𧄨
菴與杜松。其草宜楚棘。見是土也、命之曰五施。五
七三十五尺而至於泉。呼音中角。其水倉。其民彊。

……中略……

- ① 墳延者、六施。六七四十二尺而至於泉。
- ② 陝之芳、七施。七七四十九尺而至於泉。
- ③ 祀陝、八施。七八五十六尺而至於泉。
- ④ 杜陵、九施。七九六十三尺而至於泉。
- ⑤ 延陵、十施。七十尺而至於泉。

表 I

(1) 土壤

地員篇原文							解 釈			
名称	特点	宜種	泉	音	数	水	夏緯瑛氏説	友子・王達兩氏説	王云森氏説	原宗子試案
A 瀆田	悉徙	五種	35尺	角	64	倉	沖積土(江淮河)	関中灌溉田(悉徙)	自流灌溉田	淤土田
B 赤墟	歴疆肥	五種	28尺	商	72	白 甘	大平原中疏厝剛 強肥美的土	関中普遍の黒褐土 = 栗色土	赤黒色剛土 無鹼	黄墟土
C 黄唐	宜縣澤行廢落 地潤数毀, 難 以立邑置廡	無宜 黍稷	21尺	宮	81	黄 糗 流徙	虚脆の鹽鹼土	= 黄堂 = 汰苑 = 渭・洛間の沙漠	沙漠(土壤 水透性好)	黄墟土
D 斥埴		大菽 麦	14尺	羽	96	鹹 流徙	帶鹽質の黏土	= 赤埴 = 鷄糞土 = 華山下の土壤	低湿鹽鹼土	兩合土 (黄潮土)
E 黒埴		稻 麦	7尺	徵	108	黒 苦	華北濱海地区 鹽質の黏土	= 香河土 = 渭河兩 岸黒黏土, 非鹼性	低湿鹼土	砂姜黒土

史 学 第六三卷 第一・二号

(2) 植生

土壤名	草		木	
A 瀆田	楚 棘	ノバラ等	柎 輪 杜 松	ナラカシワ アベマキ ホウショウ タブノキ トウマメナシ マツ属
B 赤墟	白茅 藿	チガヤ オオアブラス スキ	赤棠	マメナシ
C 黄唐	黍 稷 茅	ヌカキビ エノコログサ カリヤス	樞 擾	チャンチン カラグワ
D 斥埴	苺 藿	カラスウリ メハジキ	杞	カワヤナギ類
E 黒埴	萃 蓍	ウキクサ スイバ	白棠	ズミ
F 山	縣泉 如茅 走	ワタスゲ	楠	ダフリアカラマツ
G 之 上	復呂 魚腸 藿	オトコエシ	柳	ヤナギ属一般
H 泉英	薪 白昌	セリ セキシヨウ	楊	ヤマナラシ属一般
I 山之材	兢 蓄	メナモミ ヤナギタデ	格	コノテガシワ
J 山之側	當 藁	ヒルガオ科 ヨモギ	品楡	ニレ属一般

(3) 粮食作物

土壤名	粮食作物名		原 試案
K 五粟	大重	細重	大麦(オオムギ)
L 五沃	大苗	細苗	小麦(コムギ)
M 五位	大葦無	細葦無	燕麦(カラスムギ)
N 五蘆	櫛	葛	山藥(ヤマイモ)
五壤	大水腸	細水腸	稗 (ヒエ)
五浮	忍	藤忍	薏苡(ハトムギ)
P 五悲	大稷	細稷	不黏粟(ウルチアワ)
五纏	大邯鄲	細邯鄲	蕎麦(ソバ)
五壘	大荔	細荔	?
五剽	大秬	細秬	同左(クロキビ)
五沙	大苺	細苺	瓠子(ヒョウタン)
五塙	大糲杞	細糲杞	高粱(?) (モロコシ)
Q 五猶	大華	細華	荏(?) (エゴマ)
五壯	青粱		稗粟(モチアワ)
五殖	鴈膳		莧(老槍穀)(ヒユ)
五穀	大菽	細菽	同左(ダイズ)
五鳧	陵稻	黑鵝 馬夫	陸稻二品種(オカボ)
五桀	白稻		水稻(イネ)

三三三 (三三三)

- ⑥ 還陵、十一施。七十七尺而至於泉。
- ⑦ 蔓山、十二施。八十四尺而至於泉。
- ⑧ 付山、十三施。九十一尺而至於泉。
- ⑨ 付山白徒、十四施。九十八尺而至於泉。
- ⑩ 中陵、十五施。百五尺而至於泉。
- ⑪ 青山、十六施。百一十二尺而至於泉。青龍之所居、庚泥、不可得泉。
- ⑫ 赤壤勢山、十七施。百一十九尺而至於泉。其下青商、不可得泉。
- ⑬ 陞山白壤、十八施。百二十六尺而至於泉。其下駢石、不可得泉。
- ⑭ 徒山、十九施。百三十三尺而至於泉。其下有灰壤、不可得泉。
- ⑮ 高陵土山、二十施。百四十尺而至於泉。
- F 山之上、命之曰縣泉。其地不乾。其草如茅与走。其木乃橢。鑿之二尺、乃至於泉。
- G 山之上、命之曰復呂。……中略……
- J 山之側、其草莒与蓼。其木乃品榆。鑿之三七十二一尺而至於泉。
- ……中略……
- K 羣土之長、是唯五粟。五粟之物、或赤或青或白或

黑或黄。五粟五章。五粟之状、渾而不朒、剛而不穀、不濇車輪、不汚手足。其種大重細重、白莖白秀、無不宜也。五粟之土、若在陵。在山在隕[△]在衍[△]、其陰其陽、尽宜桐柞、莫不秀長。其榆·其柳·其檠·其桑·其柘·其櫟·其槐·其楊、羣木蕃滋数大、條直以長。其沢、則多魚。牧、則宜牛羊。其地其樊、俱宜竹箭、藻龜·檜·檀。五臭生之、薛荔·白芷。蘘蕪·椒·連。五臭所校、寡疾難老、士女皆好。其民工巧、其泉黄白、其人夷媚。

……中略

L 五沃之土、若在丘在山。在陵。在岡、若在陬陵之陽、

其左其右、宜彼羣木桐柞扶櫛。……中略……

M ……五位之土、若在岡在陵。在隕[△]在衍[△]在丘在山、皆

宜竹箭、求臚·檜·檀。……後略。

以上①～⑮は、⑪～⑭を除けば、土壤名乃至土地名と思われる冒頭の数字文字とその地下水位が記されるのみで、A条やK条の如き説明文が無く、どのような土地について述べているのか、またかかる記述は何が目的であるのか、必ずしも明らかではない。ただし、表Iに示したA～E、F～Jの部分と対照してみれば、①～⑮は、率ね平野部というよりは丘陵地乃至山地に類する土地につい

ての叙述だと見ても、大過はなからうと思われる。

地員篇をめぐっては、既にいくつかの先人の研究もある。それらのうち、この十五条に関して特徴的な四氏の理解を、表Ⅱにまとめてみた。⁽³⁾

各条冒頭の呼称のうち、他の古典に特定の場所の固有名詞として記録のある地名と共通するものについては、その固有名詞で呼ばれた場所の地形に類似した土地を形容した言葉だ、と解するのが、王紹蘭説の特徴である。

しかしながら、甘肅・陝西・山東と、広域に散在するこのような場所の実態が、地員篇に直ちに反映されているとみなしうるか否かは、検討を要する問題であらう。

かような固有名詞との関連性を、全く考察の対象としないのが、夏緯瑛氏の分析法であり、夏氏は①―⑮の叙述順序を地勢の高低順即ち海拔順であると規定する。地表面の高低と地下水位の深淺とが対応するもの、と理解されるのである。王雲森氏はこれに拠り、⁽⁴⁾友于・李長年両氏も、分析方法は同様である。

しかしながら、既に拙稿bcで述べた如く、地員篇A―E、F―Jに記される土壤の叙述順序は、その土壤が存在する場所の海拔に対応していない。むしろ、一見深い地下水位であるかに見える高い海拔の場所にも、地下

水位の浅い地点が在って特殊な土壤を形成していること、また当然その逆もあることに着目し、海拔以外の景觀の特徴——土質や植生によって、意外な水位の地下水の存在を予想しうること、更には地下水位の人為的制御も可能であることを述べている点に、地員篇の特徴があると思われる。①―⑮についても、その叙述順序と、そこに述べられている土地の海拔とを、軽々に対応させることには、賛同し難いのである。

夏氏はまた、『爾雅』积地「下湿曰隰、大野曰平、……大阜曰陵」を根拠として、「陵」字は「石」を混えない「土」だけでできた丘陵、「山」字は「石」を混えて形成された丘陵だ、との区別を立てる。が、後にも述べるように、中国内の固有名詞について見てゆくと、丘・陵・山……といった文字の用法は様々で、時に同一地に対して、山・陵・邱……と、二様、三様の呼び方をする例もしばしばである。例えば、後述する『周礼』大司徒の賈公彦疏の如く、

案『爾雅』积地云「高平曰陸、大陸曰阜、大阜曰陵、大陸曰阿、可食曰原」、是陵与丘、高下異称。皆無石者也。其有石者、亦曰陵。故『左氏』僖三十二年云「殺有二陵」⁽⁵⁾。南陵、夏后臯之墓也。其北陵、文王

表Ⅱ

原文	王紹蘭説	夏緯瑛説	友于・李長年説
墳延 42尺	膏肥・引長	丘陵と原濕の間で平原に比べ 稍高い 蔓坡地=墳衍(周礼・大司徒)	起伏の程度1
陝之芳 49尺	陝隘之旁	峡谷の附近	起伏の程度2
祀陝 56尺	阨塞陝隘之地	王説是。峡谷地。	阨陵の誤り 起伏の程度3
杜陵 63尺	大阜純土(土を戴せた石・ 石を戴せた土の比いでない)	=土陵。王説是。 較大な土阜。	起伏の程度4
延陵 70尺	闕? (cf『管子集校』所 載「呉季札封于延陵……」 の文)	杜陵より更に広大、地勢更に 高く、水泉もやや深い。	起伏の程度5
環陵 77尺	陵形が環状に圓轉(『漢書』 地理志北海郡の營陵の類)	丘陵が連接して廻っている。 延陵より更に広大、地勢更に 高く、較深。	起伏の程度6
蔓山 84尺	山形が蔓延し長い。『山海 經』北山經・蔓聯之山の類	巒山=蔓延する山。大山外の 岡の類 石土堆積で成る。絡繹数十百 里のもの。	乗馬篇の蔓山 起伏の程度7
付山 91尺	土山の小者(『説文』附婁、 小土山。『左伝』附婁無松 柏の例)	王説是。多土の小山 巒山より稍高く水泉も較深。	起伏の程度8
付山白徒 98尺	付山で白徒(土)のもの	白徒から成る附婁山。 附婁より稍高く水泉も較深。	起伏の程度9
中陵 185尺	中陵、朱藤	二者(杜・延・環陵と高陵) の中間の土阜陵山が雜錯する のは地勢高低の次序だから。	起伏の程度10
青山 112尺 青龍之所居、庚泥、 不可得泉	河峽の上り(富平県西で、 河岸に両山相對し、その間 から水の出る地を、青山峽 としている類)其泥は庚庚 として強く堅い。	石・土が青いので名付けた。 庚泥は、堅強な泥土。	起伏の程度11
赤壤勢山 119尺 其下青商、不可得泉	土柔和で色赤。泉が得られ ないから悲意(『韓非子』 十過篇)あり	=勢山赤壤。多石の小山で赤 土が有る物。 青商=罍商=塊疆、疆磔。	起伏の程度12
陞山白壤 126尺 其下駢石、不可得泉	陞=陞=磊=衆石 肥えた土壤の意	王説是。白土で磊石の多い山 駢石=連亘する石層。	起伏の程度23 (最高の高さの丘)
徒山 133尺 其下有灰壤、不可得 泉	成山(『史記』封禪書・成 山斗入海の『索隱』斗絶曲 入海)の形	徒山=土山、(墳延以下高陵 土山まで皆丘陵地で徒峻な山 は有る筈がない) 灰壤=炭壤=石炭(張佩綸説)	起伏の程度14
高陵土山 140尺	陵之高者、純土無石	地員篇中丘陵地で最高の土 山。	起伏の程度15

全て関中平原
北部の丘陵群
で、調査結果
を15段階に纏
めたもの。
土質から石質
へと漸次移行
(山東の丘陵
は、洪積台地
が多く、等高
なので適合し
ない)

之辟風雨也」。是有石者也。

といった説もある。賈疏の引く『左伝』の記載は、杜注・孔疏に拠れば、穀の山は谷深く両山の山腹が迫っているので風雨の勢が弱まってしのぎ安い場所との意であるらしく、そのような山谷であれば、なるほど大岩を含めて「石」のある地のはずであり、それを「陵」と記す記載が確認できることになる。そもそも「土」と「石」

の区別は、基本的には風化の進行度を示すもので、時間の経過と共に変化してゆく要素である。人為的操作——耕作やら陵墓造営やら——に拠らずして「純土」の丘陵となるものは、その表層のみを見るにもせよ、全地球的に見て、黄土高原の風成丘陵の如く複雑な土壤の再集積過程を経た丘陵⁽⁶⁾などを除けば、ごく特殊な存在だと云える。地員篇の「陵」字を「純土の阜」と規定するならば、その叙述対象地域は、かなり限られてくることになる。夏緯瑛氏の地員篇に対する立論の大きな柱として、その叙述対象に「黄土」が含まれていない、との判断があり、友于氏・李長年氏らとの対立点となっているのだが、この「陵」字に関する理解は、その夏氏自身の体系に矛盾を生ぜしめるのではあるまいか。確かに、例えば『爾雅』積山に、

……多小石、礫。多大石、礪。多草木、蛄。無草木、咳。……石戴土、謂之崔嵬。土戴石、為砮。……

と見えるなど、古代中国の人々が山地の構成要素に対して細やかな観察を行なった跡を窺わせる記載は散見される。が、かような『爾雅』の用字・用語・概念規定の全てを、直ちに地員篇のそれに置き換えても良いものであろうか。

さらに、夏氏は、①②⑤の記載内容について、

十五種丘陵地、地勢雖逐一加高、但每高各加一施、全部並無多大差別、与以下的山地不能相比、它上面所生的植物当不致有大差異。這恐怕就是在這丘陵地区不談植物的緣故。

と述べ、地勢が高くなれば地下水位が一施(七尺)深くなるだけで、全体の土壤に大差はなく、植生にも大差は無いので、植物について論じられていないのだ、との判断を示される。しかしながら、地下水位が七尺(一応、漢尺約二三センチを換算の基準とすれば、一六一センチ)違えば、植物生育のための水分条件には相当の影響を生ずる。まして、「七施」とされる②「陝之芳」と、「二十施」の⑤「高陵土山」とに、植生の差が全く無いとは到底考えられない。もし、夏氏の判断のような意味

でこの十五条が記されているとするなら、地員篇全体が、科学的理解に値しない怪奇な文章だということになりかねない。地員篇の前後の記載と異なつて、①～⑮に植生が記されていない理由は、別途、考察を要するものと思われる。

いまひとつ着目しておきたい点は、各条冒頭に記されている呼称が、どのような理由で命名されているのか、ということに関する諸氏の理解の態度である。友于氏・李長年氏は、地員篇全体に対して、その地下水位の深淺の度が幅広いのは関中地区にのみあてはまる、と判断し、また「肥沃な土」とは黄土であるとの前提で立論されるので、この十五条全体を黄土高原の丘陵だともみなし、個別の呼称の考察を示さない。王・夏両説は命名の理由を、時に地形に縁るものとみなし、又時にその地を構成する土壌の形容と解する等、理解の方向がバラバラである。呼称の二三文字以外、各条が如何なる実態に対して何を述べんとしているかを探る手がかりに乏しいこれらの条文であるから、かような考証の方途を辿るのも、或はやむを得ないのかもしれない。が、この十五条の伝える情報量が殊に少ないのなら尚更、数文字の呼称には、地員篇成立時点で想定された読者に、その意味するところを

理解せしめる何らかの条件が存在していたのではなからうか。A～Eは、明らかに個々異なつた文字を用いて土質を表現し、F～Jは、逆に「山」という文字を共通させて地勢を表現している。この十五条は、兩種の命名法の転換点に位置するとも云えよう。その転換点が十五条のどこに存在しているのかを明らかにできれば、地員篇編者が与えている実態理解のための鍵を見出しうるのではあるまいか。その上、既に諸氏によつてしばしば指摘されているように、これらの条に錯簡・譌字・脱落等が存在する可能性は否めず、殊に⑬条の「陞」字は、管見の限り、『説文』をはじめ現行の辞書類や諸文献に、その用例を見出し難い。となれば、「陞山」がどのような概念を表す文字・用語であるのかは、前後の条文の記述原理を勘案しつつ、検討してゆく必要があるだろう。

以上の諸点に留意しつつ、本稿では、十五条が示す各土壌の実態を探り、合せて、この部分が地員篇の中で示す特殊性は、何に拠るものであるかを検討してみたい。

二 墳延と陝・陵・山

まずは、各条冒頭にある十五種の呼称について、概観してみよう。

①墳延を除けば、他の条文には、陝・陵・山いづれかの、常識的に解して山地・丘陵地に関わると思われる文字が配されている。前節に掲げた地員篇の後文K条に、「五粟」なる土壤がどのような地勢に在っても桐や柞の植樹に適していることを表現して「五粟之土、若在陵在山在隕在衍、其陰其陽、尽宜桐柞、莫不秀長」と記していることに照せば、これらの文字が地員篇においても、何らかの丘陵地を指して用いられていることは確認できる。類似の表現は、L五沃・M五位の条にも見出しうる。（引用原文中に、傍点を付した。）

これらの文字が用いられていない①墳衍という名称は、では、いかなる意味を持つであろうか。夏緯瑛氏は『周礼』地官大司徒の、

一曰山林、……二曰川沢、……。三曰丘陵、其動物宜羽物、其植物宜覈物、其民專而長。四曰墳衍、其動物宜介物、其植物宜莢物、其民暫而瘠。五曰原隰、其動物宜羸物、其植物宜叢物、其民豊肉而庫。に拠つて、

墳延、即墳衍。介於丘陵与原隰之間、該是比平原稍高的蔓坡地。

とする。即ち夏氏は大司徒の文義を、丘陵より墳衍が、

墳衍より原隰が、より低地を指す言葉として記されたものと解し、かく依拠されたのであろう。しかしながら、鄭注が、

水崖曰墳、下平曰衍。

とするのをはじめ、『周礼』注釈者の多くは、『説文』水部の「漬、水崖也」に基づく仮借、『釈名』の「下平曰衍、言漫衍也」や、『左伝』襄公二十五年「井衍沃」の杜注「衍沃、平美之地」等々を援用し、この文における「墳衍」の義を水辺の平地と見る。かような諸注の理解は、「墳衍」の産物のうち動物が「介物」即ち鄭注「龜鼈之属、水居陸生者」に従えば水陸両棲の動物、とされていることにも付合するといえよう。本稿は『周礼』を論ずることが目的ではないので、詳しくは立ち入らないが、かかる旧注に従う限り「墳衍」は水辺の地の総称であり、賈疏も「此十地、皆兩兩相對為名」とするようになり、山と林、丘と陵に、地勢の差異を認めるとすれば、「墳」は河岸の崖——河岸段丘、「衍」は沖積平野の区別がある、との解も成り立ちそうである。「原隰」についても鄭注は「高平曰原、下湿曰隰」としてしているのであるから、夏氏が想定された丘陵↓墳衍↓原隰の高低階梯は、少なくとも『周礼』の解釈として一般的なものとは云えまい。

もつとも、『説文通訓定声』が「衍、讀為延。声之誤也。進也」とするように、延と衍が混用されるケースも応々に見受けられるから、『周礼』大司徒の「墳衍」は、実は「墳延」ないし「墳延」の誤まり、と考えるならば、①条「墳延」との関連性を考えることも可能にはなるだろう。が、それなら何も、大司徒の文を持ち出す必要は無いのではないか。

王雲森氏が②～⑮については、殆ど夏説に依據して解釈しておられるにも拘らず、この①条についてのみは、馬融の「墳、有膏肥也」、『爾雅』積舘の「延、長也」を援いて「土地が肥え、肥力に耐久性のある平地」の意と解し、A瀆田以下E黒埴までの「平地」を描写するグループに含めて立論されたのも、夏氏のこの部分の論法が、些か不明瞭なためであろう。

とはいえ私は、夏氏が「墳延」の地を、「陝之芳」以下のグループに含めて分析されることについて異を立てるものではない。前述したように、①～⑮条の、地員篇の他の箇所比して特殊な記載内容に照す時、そのグループ分け自体は妥当だと思われる。

ここで着目したいのは、前に掲げたように、K・M両条に「隤」「衍」の二字があるにも拘らず、①条には

「墳延」と記されている点である。前述したように、K・L・M条においては、五粟・五沃・五位の土壤がいに優れているかを述べるために、「どんな地勢にあつても」の意で丘・陵や「隤」「衍」を並べているのであるから、大司徒「墳衍」を参照して考えるべきなのは、むしろK・M条の「衍」ではあるまいか。①条において、「隤」ではなく「墳」に作ることは、A～Eの呼称が土壤形質を表現するものであつたことを想起させる。と同時に、⑤条延陵の「延」字の用法と合せ考えつつ、④～⑥、⑩⑮の「陵」字、⑦～⑨、⑪～⑭の「山」字と、「墳」「衍」との関係を探る必要があるだろう。④～⑮各々の陵・山以外の文字は、A～Eの如く土質を描いているか、F～Jの如く山・陵の地勢ないし山容を表現しているか、である。

従つて以下、陵・山以外の文字の意味を考えてゆけばよいのだが、この場合、②③両条は例外になりかねない。「陝」は常識的に考えて、両側に山腹の迫る谷、崖に挟さしかまれた地溝の意であろう。王・夏両説は②陝之芳を、「陝谷の旁ら、付近」の意、③祀陝を「きわめて狭溢な陝谷」の意だ、と述べる。が、「陝谷の付近」とは、いったいどういう地勢の場所を指すのだろうか。峻険な

崖に挟まれたその谷底が「陝」であるなら、「旁」とはその崖のつぺんということになるのだろうか。あるいは又、洪積世以前に形成されて侵食堆積を受けた河岸段丘の意であろうか。さもなければ、谷を形成していた両崖が尽き、谷が平野に接する付近、との意であろうか。かく三様の「陝之芳」を仮想する時、地下水位七施ないし八施とみなしうるものがあるだろうか。この王・夏両説は、一見②③条の実態を説明しているように見えて、実は何も明らかになっていないと思われる。

そこで②③条については、④条以下がどのような「陵」「山」をどのような視角で語っているかが明らかになった時点で、立ち戻って考えてみたい。

三 「得べからざる」地下水

陵・山の実態を窺う手がかりが最も豊富なのは、地下水について「不可得」と記す⑪⑫⑬⑭の四ヶ条である。各条に「一尺而至於泉」とあるのだから、地下水自体が存在しないのではなく、一応地下滞水層は発見しえていると考えられる。それを「得べからず」——利用できない、或いは利用すべきでない——とは、いかなる事情なのであろうか。

この四ヶ条のうち、⑫⑬⑭には「其下」の二字があるのに、⑪にはない。そこで夏緯瑛氏も『管子集校』も、⑪について「青龍之所居、其下庚泥、不可得泉」と、「其下」の二字を補なっている。まず、このような校訂が妥当か否か、検討してみよう。

王紹蘭は、⑫⑬⑭の「其下」を、各々の山の下、即ち地表から地下水に至る過程の地層の意に取っているようであるが、夏緯瑛氏は「地下水のある位置から更に下の地層が」の意と見る。これはいずれに従うべきだろうか。

一般に利用可能な地下水は、未風化の火成岩などの岩盤や未固結粘土層などの不透水層の上部に空洞が在る時、そこに滞水・流水層をつくるか、砂層・礫層などがあって帯水層を形成しているかの、いずれかの形態をとる。後者の場合、砂層や礫層の下には何らかの不透水層が存在しているわけである。

⑬条において「其下」にあるのは「駢石」である。これを夏氏は「駢拇」「駢脅」の用字例を挙げて「連巨的石層」だと表現される。だが夏氏の描くイメージは今一つ明瞭でない。仮に「礫が集積している」の意であれば、それは透水層となり、「それより下層」にも地下水の滞水する面があるはずである。というよりむしろ「至於

「泉」と云うその地下水の位置自体が礫層——駢石そのものの、ということにもなる。類似のケースは、⑭条「灰壤」についての夏氏の理解の場合にも発生しうる。夏氏は「灰壤」を張佩綸説⁽⁷⁾によつて石炭層だと解するのだが、石炭層は云うまでもなく透水層であり（炭坑の出水による落盤事故等は周知のことだろう）、その上下の地下水は自由地下水だといえよう。「其下」に「泉」が得られないとは考えられないのである。

或いはまた、⑬条についての夏氏の理解が、通例「駢脅」を「一枚あばら」と釈する際の「駢」字の釈義のように、石と石とが固結している状態——即ち礫岩を想定しておられるのだとすれば、これは確かに不透水層を形成する。従つて「礫岩層より下では地下水を得られない」との文章は、一応成り立ちうる。しかしながら、そもそも、一、三メートルの浅井戸ならば水質不良ということもありえようが、三〇メートル前後の深度に地下水脈を確認しえていながら、さらにその下層に別の地下水を求め、ということがありえようか。現代の地質学調査のように、純然たる学術目的で掘削技術の及ぶ限り深くまで地下層を探つてゆく、といった行為、更にその定式化・記録といった行為を、『管子』成立の時代に想定

するのは無理というものだろう。

そこで⑫⑬⑭の「其下」は、王紹蘭の漠然とした想定に、当面従い、各呼称が指す地表面の「其下」、つまり地表と地下水層との中間帯とみておこう。となれば「不可得」である「泉」とは、「一尺而至於泉」というその同じ「泉」であり、存在は確認できているがその地下水を利用することは「不可」であるとの文義になるであろう。では、その理由は各々いかなることであるのか。

⑬陞山白壤の場合、地表には「白っぽい土」に見えるものがあり、その下層に「駢石」、そのまた下に地下水という構造である。この駢石が先に想定した未固結礫層であるならば、その上層に火成岩が存在するケースは一般的とはいえない。礫堆積の上にマグマが流れれば、相当の高温・高圧を受けて礫層は固結し礫岩となるのが普通だろう。無論、まず火成岩が存在し、風化が進んで岩体内部に空洞を生じて後水中に没したり断層を生じたりして砂礫混入を受けるケースも想定はできる。が、水没したり、地下三〇メートルほどに巨大な空洞を生ずるまで風化が進んだ火成岩ならば、いかに乾燥がちの古代中国地域⁽⁹⁾であれ、表層の風化も物理的風化（細粒化）のみならず、化学的風化も進行するのではなからうか。とな

れば、それが元来優白色火成岩（珪素の割合が多く、物理的風化のみを受ければ、白っぽい砂礫となるもの）であつたとしても、正長石の変色等化学的風化によつて、黄色ないし紅色の粘土鉱物を生ずると思われ⁽¹⁰⁾。即ち、表層を「白壤」と看取される状態にはならないと思われる。

従つて、駢石を未固結礫層と仮定するならば、その上層は堆積層、それも白っぽく見える石灰岩層と考えざるを得ない。しかしながら石灰岩は、堆積岩の中でも最も柔かく加工も容易である。石灰岩の下に礫層があり帯水している、という構造ならば、取水に何らかの障害が生ずるとは考え難いのである。

となれば、駢石Ⅱ未固結礫との仮定を捨てるべきであろう。地員篇が「駢石」と記す状態は、畢竟「石が連なっているように見える」ものであるわけで、その形成過程が礫の集積プロセスとは限るまい。逆に巨大な岩体が割れてゆく過程、即ち花崗岩等の優白色火成岩が節理を発達させ、空隙に沿つて下層に水を浸透させた結果、下層に滞水層を生じたケースではないだろうか。三方向に節理の発達した花崗岩は、確かに日本城郭の石垣の如く、石を連ねたかの如き外観を呈する。表層は物理的風

化によつて白い細砂堆積を成しても、化学的風化の進行していない比較的新しい花崗岩であれば、空隙が粘土で埋まっているということも無いわけだ。かような岩体によつて構成されている地形の場合、断層等によつて岩体が露出した地点での湧水等を見て、表層から地下水までの深さは確認できたとしても、その地を表層から水脈まで掘削するのは、前近代の技術による限り相当の困難であらう。

⑭条徒山の下の「灰壤」を、張佩綸説に拠つて石炭層と解すれば、その下の地下水脈を予想できることは前述した。しかし乍ら、地員篇の用字例から見て、石炭層を「壤」と表現しているとは考え難い。「壤」字は、この⑭条と⑫⑬を除けば、後文にN五壤なる土壤名がある。「若沢若屯土」とされるその土は、拙稿hで述べた如く水辺の沖積土を指すと思われるが、⑫⑬を併せ考えても、少なくとも固結していない状態を指す文字と思われる。さりとして、「灰色の土」と云えば、まづ先に想起される現代中国語の「灰壤」——即ちポドソル化の進行した漂白土壤の類⁽¹¹⁾とも考え難い。ポドソル化とは自由地下水による溶脱の進行を意味するのだから、地下水位が三〇メートル以上にもなる、ということはありません。

ある。

灰壤とは石墨（黒鉛）鉱床、それも土状石墨（amor-
phous graphite、⁽¹²⁾ 隱晶石墨ないし無定形石墨とも称す）
を意味するのではないか。石墨の生成過程は複雑だが、
中国では先カンブリア代の華北地塊（中朝準地塊）が
ジュラ期の燕山造山期に受けた広域変成作用により、有
機質を含む基岩から析出された炭素が、石墨構造の結晶
体となったものである。同時の変成作用によって形成さ
れたタール・石炭や金紅石等を伴うこともあるが、注
目すべきは、周辺に巨大な変成岩の岩体が存在する点で
ある。著名な鉱床の一つである山東省の青島地区から烟
台地区にまたがる南墅鉱床の場合、例えば劉家庄では二
キロほどに亘って、花崗岩と混合した角閃岩・輝緑岩・
大理石・透輝岩などの岩壁が続き、その直下の断層面に
沿って、石墨鉱床が散在する。南墅の場合、変成作用を
受けた時期の地形は浅海性の海中火山だったとのことで、
後、隆起したわけだが、一帯の地質が変成岩であるから、
随所に褶曲・断層が存在する。石墨鉱床周辺は火山岩や
変成岩の部厚い岩盤の下に、漸く不透水層たる粘土層に
至るわけで、三十メートルの井戸開鑿は困難を極めるで
あろう。

次に⑫赤壤勢山の「下」に在るという「青商」とは何
かを考えたい。この「青」字を、趙用賢本等は「清」に
作り「清商」となっている。従って『韓非子』十過篇に
見える晋の平公と師曠のエピソードで語られる楽調の呼
称「清商」と同一文字になってしまったわけで、王紹蘭
の奇妙な解釈は、これに因る。また夏緯瑛氏や『管子集
校』⁽¹⁴⁾は、『説文』に、「𦵏、𦵏商、小塊也」とあることに
依拠して「青」を「𦵏」に改むべしとする。しかしなが
ら、「青」字のままでも、充分理解できるのではあるまい
か。

白川静氏は「青𦵏」自体に「丹𦵏」が含まれており、
丹（硫化第二水銀）を採るため掘り下げたその井中の石
が青丹であることを、上部の生によって示す、形声の文
字であるとされる。⁽¹⁵⁾ 青丹は、青朥・空青・曾青等々とも
記されて本草書に頻見される顔料であり、藍銅鉱 Cu_2S 。
 $(\text{OH})_2(\text{CO}_3)_2$ の謂である。即ち、藍などと異なつて色
変化の無い、古代の青色表現には欠かせない品で、『旧
唐書』地理志には淮南区について「土貢、空青」とあり、
徵集品目として扱われる時もあったことが確認できる。
藍銅鉱は、数ある天然銅の一形態で鮮かな青色を呈する
鉱物であり、葡萄状または鐘乳状の塊りをなす。⁽¹⁷⁾ 自然界

で長期を経過すると美しい緑色の孔雀石 (malachite, 緑青・石緑・銅緑・緑鉱ともいう。Cu₂CO₃·(OH)₂) に変化する場合もある。他に青色顔料としては、孔雀石や胆礬 (Chalcanthite 石胆 CuSO₄·5H₂O) や水胆礬 (brochantite, 白青・碧青, Cu₄(SO₄)(OH)₆) も用いられる。これら銅鉱の一般的生成型としては、熱水鉱床の場合と接触変成鉱床の場合がありうるが、藍銅鉱の場合、五〇〇〜二七四度前後 (気成期→熱水期) のマグマが石灰岩と反応し、そこに生じた黄銅鉱 (CuFeS₂) などの鉄・銅・鉛・亜鉛等々の硫化物を含む鉱物が晶出し、その黄銅鉱などが長期間を経て酸化した結果出来上るとされている¹⁸⁾。当然その鉱床の周辺には、鉄の酸化物も存在するわけである。従つて例えば、著名な古代の銅山である湖北省の銅緑山について「大理石周辺に堆積した紅色粘土の中には、孔雀石・赤銅鉱や自然銅があり、自然銅は常に、赤銅鉱・褐鉄鉱に包まれて¹⁹⁾いるか、さもなくば褐鉄鉱の泥土の中に存在している」との報告があるように、藍銅鉱と褐鉄鉱が同一地域に存在する例は多い。これに対し、白青や胆礬は熱水鉱床に多く、マグマが地表に移動してゆく過程で様々な鉱物が主に硫化物の状態で晶出して鉱脈となるのだが、地表層に堆積・露出する多

様な鉄化合物は風化して、「鉄帽」と呼ばれる多様な褐鉄鉱の層となる。その下に、硫化物の状態で銅が晶出している時、白青等が形成されているわけである。即ち、青色顔料たる曾青・緑青・碧青等の鉱床の上層には、生成過程の如何を問わず、褐鉄鉱を含む赤い土の存在が予想されるのである。

なおまた、青色顔料中、石胆即ち硫酸銅五水和物は、周知の如く可溶性で、鮮やかに青いその溶液は有毒である。『読史方輿紀要』卷一〇二に、広東省翁源県の宝山という銅山について

岑水在県北。源出羊徑、一名銅水。可浸鉄為銅、水極腥惡、兩旁石色皆赭、不生魚鱉禾稼之屬。

と記しているのを引くまでもなく、銅山周辺の水が、飲用水・農林漁業用水として不適確なのは明らかであろう。なお、前近代からの鉱床に共通する地形的特徴として、

『中国古代鉱業開発史』は、

- (1) 巨大な硫化銅鉱帯は、地下水面上に位置する。
- (2) 鉱区の地形は徒峻であり、溝谷が発達し、主な鉱体は露出していたり断層に位置していたりする。
- (3) 鉱体を囲んでいるのは珪酸塩岩もしくは珪酸を含む石灰岩である。

との三点を挙げている。

かく見てくる時、⑬赤壤勢山の地下にある水を「不可得」なものとしているのは、かかる青色顔料の原料たる銅鉱であろうと思われる。「青商」の「商」字は、「商」（すなわち嫡系・根源の意）が誤まったものか、あるいは曾青・空青等の、「青」の質を形容する文字の壊であるかもしれない。が、白川静氏によれば「商商」字の上部「辛」と、「章章」字の上部「辛」とは、ともに入れ墨の器である「辛」の形だという。「商」字について、『説文』段注も引く『漢書』律曆志に「商之為言、章也」とある如く、「章」字との関係が認められる文字であるとする、現行の「商」字の用法とは異なった、より具体的な事物を指して「商」と記す用法が存在した可能性も、捨て切れないと思われるのである。

さて、四条のうち残る⑫青山の条には「其下」の二字が無い。となると、この文章のままに読めば、地下水の在る位層自体が「青龍の処る所」であり、なおかつ「庚泥」であるということになる。「青龍」とは、一見おどろおどろしいようであるが、現今漢方医学で「竜骨」と云えばナウマン象など古生物の化石を指す用例にも明らか如く、大型動物の化石を意味しているものと思われる

る。云うまでもなく化石は堆積層にのみ見られるものであり、地表に隆起して日が浅く、風化・変成作用を受けていない泥層・砂層であれば、未固結であり、それ自体が帯水層となるのは前節に述べた通りである。「庚泥」の「庚」の字義は、王紹蘭の説く如く「実」の義であるが、語の具体的意味は、「堅強」ではなく、水を含んでドロドロと粘性のある、砂質シルト乃至砂質粘土を指すものと思われる。

即ち、化石が埋積されている泥土層から汲水しても、得られるのはベタベタの泥水で、到底利用できない、との意を示すのであろう。

以上、四条の付言部分は、つまるところ、存在している地下水を利用できない、と述べているのであるが、取水工事が困難な場合(⑬⑭)と、取水しても利用できない場合(⑪⑫)がある、ということになる。かかる言及は、実地に掘削を試みた経験、あるいは経験の伝承に基づいて、取水不適地の外見的特徴を定式化した理由説明となっていると思われる。

以上述べた地下の状況を前提とすれば、では、いかなる地表の景観が推定できるであろうか。

四 土質・産物による命名か

前節において検討した如く、地下水利用不能との付言がある時、その理由は、各々の地質構造や鉱産物と深く関係しているとみなしうる。従つて、各条が標榜する呼称の命名理由も、かかる土質や産物を示す目的である可能性、即ちA—Eパターンの命名法である可能性は充分認めえよう。

そのような視角で十五条を眺めれば、まず眼につくのは④杜陵と⑦蔓山である。「杜」字は、地員篇冒頭のA条にも見える樹木名であり、拙稿cで述べた如く、「杜梨」トウマメナシを意味すると思われる文字である。杜陵を、このトウマメナシの木の茂る丘、と解することは、一応可能であろう。

また「蔓」には、云うまでもなく「つる草」の意がある。「蔓山」なる名称は『管子』の乗馬篇にも記され、材・軸として利用可能な程度の木が茂る「蔓山」に対しては、穀作地の九分の一の課税率を設定する、としている。この税率は、産品の採集が可能な「藪」と同率である。が、このような規定が在るといふことは、材・軸にできる木の生じていない「蔓山」も存在する、というこ

とになる。温帯における火成岩質の山は、形成直後は無論、植物生育不能地である。時の経つにつれて表層の風化が進行し、細粒化・粘土化が起つて保水層が成立すると、その水分保持の程度に見合う草類が、まず定着し始める。草の根の働きや枯葉の堆積が、山体の風化を更に進め気温・降水条件等が許せば、やがて灌木の生育が可能になる。森林の遷移過程が始まるわけであるが、その条件に欠けるか、あるいは未だ山体表層の土壌化が未発達であれば、草類のみ生育できる山も存在する。逆に大森林を擁していた山でも、皆伐によつて水分条件に多大な変化を生じ、若木が育つことも不可能になつて、草類のみが生育しているステージの場合もあるのは、云うまでもない。いずれの段階かの確定は困難であるが、つる草は草類の中でも草体に比して根が小さく、岩山と見える土地にも生育するものがある。無論林が成立した後の下草として、寄生的に繁茂する草種もあるが、「蔓山」を呼称とするのは前者の種類だからであろう。乗馬篇の「蔓山」は、そこに樹木が育ち始めた段階と考えることが可能だろう。

⑫赤壤勢山には、明らかに土質を示す「赤壤」の二字がある。赤壤と「勢」とは、ではどう関わるのだろうか。

この下には、前述したように青商⁽¹⁹⁾銅鉍床があり、黄銅鉍・褐鉄鉍等の伴出が予想される。それらに含まれる鉄の作用によって、赤色を呈している土が「赤壤」の意味であろう。これも前述したように、銅床を有する山の基岩は珪酸塩岩ないし珪質石灰岩であり、それが変成作用を受けたのだから、大理石の部分的出現や火成岩の混入も予想できる。石灰岩・大理石・火成岩等が物理的風化を受け、節理に沿って割れて細石化していることも充分ありうるから、王・夏両説の如く「勢⁽²⁰⁾礧⁽²¹⁾小石」と訓んで、「赤い壤土や小石でできている山」と解することは可能である。

⑬陞山白壤にも「白壤」という言葉が添えられており、これは前述したように、花崗岩が物理的風化を受けて細粒化した砂質土であろう。問題は「陞」字であるが、現行辞書類に見えない文字を、何らかの物質の意味に理解しようとするならば、『玉篇』に「磴、好雌黄也」とあることにでも、拠らねばなるまい。雌黄とは三硫化砒素 As_2S_3 を主成分とするもののように、『神農本草経』には中品の薬石として録入されているが、無論猛毒を含み、現在日本では使用禁止である。殺虫剤・皮膚病治療薬として外用されたもので、獨孤滔『丹房鑑源』は、淄(山

東)成(甘肅)のものを良品としている。硫ヒ鉄鉍 $FeAsS$ の形での産出が代表的であり、青商を控えた山の特産品と目されていた可能性は考えられるだろう。

では、赤壤・白壤同様に、色を表す「青」字を冠せられた⑭青山とは、何で形成されているだろうか。前節で述べたように、この地は堆積土壌であると思われる。現代中国の建築用語や本草学でも、時に石灰岩——生石灰を「青石」と呼ぶようであるが、山東省で今日「青石山」と俗称されているのは、石灰岩堆積による山である。即ち⑭条は、水成堆積地で下層に大動物の化石を残し、上層に珪質に富む堆積物を沈下させて地層不整合面を生じ、その後地殻変動によって隆起して山になる、という形成過程を辿ったと思われる。

さて、山の構成体ということになると、注目したいのが⑮高陵土山である。現代中国語で「高陵土」と云えばカオリナイト (kaolinite $Al_2 \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$) を意味するが、いうまでもなくカオリナイトという学名自体が、中国語の「高陵」に由来する。即ちリヒトホーフエンが一八六九年、江西省景德鎮付近を通り、浮梁県東の高陵山なる山の一角を観察し、その山脈が一種の片岩で構成されていることを知り、世上景德鎮磁器の素材として名

高い「高嶺土」がこの山脈の所産であることを認めると、その片岩を「カオリン片岩」と名付けたのである。リヒトホーフエンの『中国』が欧米で流布し、カオリン土族粘土鉱物の総称に用いられるようになったわけである。この磁器原料粘土を「高陵土」と呼ぶようになったのは、清初の著者不明本『南窯筆記』以後である、と『中国古代礦業開発史』はしており、現代のカオリナイトと地員篇の「高陵土」とに、直接の關係が無いのはもちろんである。が、カオリン土族を含む粘土は、何も江西省にだけ産するものではない。カオリンは、花崗岩中に再進入したマグマの中の正長石が変質し、高温高压下で絹雲母とカオリナイトを形成したものとされるが、二酸化珪素に富む粘土であれば、陶磁器材料になりうるのである。山東省城子崖で出土した龍山期の薄手白色陶器や、河南省安陽県武官大墓出土の殷代の陶壁の化学組成は、江西省の高陵土のそれと極めて近い⁽²²⁾という。かなりの高度を有し乍ら、表層のみならず山体全体が粘土化している山は、どこにでも在るといわけではないが、變成岩、殊に片岩は平行な片理に沿って風化し、粘土化も層状に進む。従って風化後の山容は巍峩たるものではなく、なだらかな形になりがちである。⁽²³⁾江西省の山が「高陵山」と

呼ばれたのは、かような山容の形容に負うものかと思われるが、磁器材料となりうるやわらかな粘土を、そのよな山の土、という意味で高陵土と呼び、更にその高陵土が特に多い山を「高陵土の山」と呼ぶことは、他の地でも起りうる事態であるように思われる。片岩は節理に沿って地表水を浸透させるが、粘土化が進めば次第に透水性は悪くなる。三二メートルの井戸は自由地下水に接しない地下水脈を探りあてて漸く得られるのである。

⑧⑨は、『集韻』に「坩、一曰白坩、白堊」、『説文』に「泐、編木以渡也。从水付声」とあるがこれも『集韻』には「泐」を「一曰、庶人乘泐。或作坩、或作柎」とあること等と、「付」字との音通を考えてみたい。白坩とは、司馬相如「子虚賦」の「雌黄・白坩」に付す李善注は白石英だとするが、『本草綱目』では「浮石」とする。現行の薬方では SiO_2 （石英）を主成分とする火成岩鉱物を用い、広東・広西・福建・山東が主産地であるという。⁽²⁴⁾石英を産するとは、つまり花崗岩質の山であればよいわけで、⑨付山白徒の「白徒」も、そのような火成岩の白い土と取れなくはない。あるいはまた、石英自体は結晶であれば無論重い⁽²⁵⁾が、白坩・浮石とされるものはマグマ冷却時の状態に拠って多孔質に固まったもの

で、水に浮くとも云う。水に浮く、となれば「拊」字に即して、いかだに作る程度の樹木が育っている山、とも考えうる。が、かようなとりとめも無い思いつきのみでは、地下水位との関係を確定するのは少々不安が残る。

⑥環陵となると、あまりに即物的ではあるが、環を作る玉（ネフライト。角閃石や陽起石の結晶）を出す山、としか解しようが無い。古代中国地域各地に玉は産出するが、河南省高陽県の独山もその一つである。この山は平野の中に孤立し、標高約二〇〇メートル。横長で長さ二・五キロ、幅一・五キロ。元古代（先カンブリア代）の塩基性火成岩侵入体で出来ており、付近の片麻岩に変成作用を生じている。玉鉱はその接触面に、接触変成作用によって晶出しているという⁽²⁵⁾。その山の姿はまさに「陵」と呼ぶべき形だとは思われる。

さて、⑤⑩⑭条が残ったわけだが、⑤⑩の延・中二字には、⑥⑧⑨条に試みた語呂合せ程度の解釈さえ、山陵の構成体・産物を意味する方向では見出しえない。夏緯瑛氏は、②「杜」も、⑨⑭「徒」も、⑮「土」も、一樣に「石に対する土」とみなす。が、前節で検討した地下水に関する記述内容に照してみても、地員篇の示さんとする概念が「石か土か」といった程度の観察力に基づく

ものとは思われないのである。そもそも王・夏両説は、「付山」の付を附婁の山＝小土山と解するのに、白徒の「徒」＝土であれば、「土山白土」との表現になる。「白付山」で済むはずではないか。「付」と「徒」が各々単独で⑧と⑭とに用いられているのに、⑨ではその両字で山を呼んでいるのだから、「付」が白石英ないし王・夏両説の如く「土」を意味するのだとすれば、「徒」は、全く別の物質か、さもなくばF-J条の如き地形・地勢ないし山容を示すパターン＝の命名に関わる文字である可能性が生じてくる。そこで、節を改めて、各呼称を、地勢を表す言葉として解しうるか否かを検討してみよう。

五 地勢・山容による命名か

本節での考察の基準とする地勢を見てゆくには、まず陵と山の意味を確認しておこう。さしあたり両字の差異を、見かけの高低差と仮定する。『爾雅』で云えば「積丘」の対象が「陵」、「積山」の対象が「山」と置き換えてもよい。かような分類は、一見非科学的に思われる。例えば牛山（海拔一七四メートル）など、ごく低い丘陵でも「山」の呼称を持つものが散見されるのだから。が、しかしかような分類は、現代地質学における山地と丘陵

地の区分とも、大差無さそうなのである。⁽²⁶⁾そこでさしあたり「なだらかな」という形容句で表現できそうな土地で、「平地」よりは高い地形を「陵」だ、と仮定しておこう。

⑦蔓山を、山容の意と解するなら、まず王紹蘭の云う「蔓延」の「蔓」の義に取るのが常識的なところだろう。

夏氏は『爾雅』釈山「巒山・墜」の郭注「謂山形長狭者、荊州謂之巒」に拠って「巒山」に改めるが、前節にも述べた通り「蔓山」は乗馬篇にも見える語であり、「荊州の地方語」とされている「巒」字に、わざわざ改める必要はあるまい。乗馬篇の課税の規定から推せば、入山伐採の容易な、ゆるやかな傾斜の山であろうと思われる。

乗馬篇には「蔓山、其木可以為材、可以為軸、斤斧得入焉、九而当一」という条に続けて、「汎山、其木可以為棺、可以為車、斤斧得入焉、十而当一」という文がある。即ち、板材や車軸用の木よりも太い、棺や車体を作りうる木、つまり蔓山の木よりも交換価値の高い樹木が成育していれば、蔓山に課す場合よりも低い税率で課税するとの意である。これは郭沫若氏も指摘するように、伐採・搬出等の労力が、蔓山での林業経営に比して必要だ、との認識を前提としているからだと思われ、その原

因は主に山腹の傾斜角など「汎山」の山容にあるだろう。「汎」字は『説文』『集韻』等が「浮」の義とし、また「罌」に通ずる。⁽²⁷⁾平野の中にフワツと浮んだような、投網をフワツと投げた時の曲面のような山は、中国の各地にも散見されるが、このような、火山で云えばトロイデ型に近い吊鐘状の山が汎山であろうと思われる。

さて、地員篇では、⑦蔓山に続くのは⑧付山と⑨付山白徒である。付・附は通用の文字であるが、前節に紹介した諸訓詁の他、『詩経』角弓の「如塗塗附」の鄭注「附、木桴也」によっても、「附」に水に浮ぶいかだの意があることは窺われる。音通による用法と思われるが、乗馬篇の汎山とこの付山Ⅱ附山は、類似の山容を描写しているのではなからうか。

⑨付山白徒は、この⑧付山の要素と⑭徒山の要素とを合せ考えるべきだろう。「徒」字を王紹蘭は斗絶・斗入の義に取る。即ち峻険の意味であるが、夏緯瑛氏は「丘陵地を云うこの十五条に、峻険な山はありえない」として、これを斥ける。しかしながら、山容と標高は別問題である。現に、王紹蘭が用字例として挙げる『史記』封禅書の「海に斗絶・曲入する」成山は、決して高山ではなく、要するに海辺の崖である。「徒」字の義はあくま

で傾斜角にあらう。標高は低くとも巍峩たる岩山の例は多く、成山を含め膠東半島の諸山の如く、ジュラ期から白亜期の所謂燕山造山運動期に成立した花崗岩や片麻岩の岩体が、第三紀から洪積世の沈下・隆起を経て沖積世に入り、表層の風化を受けて露出している場合、⁽²⁸⁾ 周辺の水成、陸成沖積層に比してさしたる海拔でないにも拘らず、吃立した山容を呈する。これらのうちのいずれかのタイプを「徒山」と見て、何らさしつかえはあるまい。

「徒」字が斗絶——切り立った——の意だとすれば、

⑧付山白徒は、全体としては平野にポツカリ浮んだような吊鐘型でも、一部に切り立った白い崖のある山、という意味になるだろう。吊鐘状の山は、無論火山とは限らない。が、トロイデ型火山は、安山岩・流紋岩など火山岩質溶岩が形成する。中国においても、例えば山東では燕山期の活動による安山岩・玄武岩が、益都断層の両側に露出している。⁽²⁹⁾ 「付山」タイプの山が、中生代の火山である場合は充分考えられる。火山岩の中で優白色性のものは流紋岩であるが、極めて風化しにくく固い流紋岩⁽³⁰⁾ 体は、節理に沿って崩落した場合、青白くガラス質に光る垂直に切り立った崖となる。第三紀—洪積世の沈降・堆積を経て再び隆起した地であれば、周囲の堆積層が流

出して岩体が地表に露出したと考えざるを得ないから、表層は風化層や残積性堆積土に覆われて丸みを帯びていても、崩落箇所は目立つ崖となろう。岩体が地員篇成立時点での地下にまで連続していれば、他の形成過程を辿った「付山」タイプの山よりも、当然地下水位は低く（つまり流紋岩層の下部に）存在することになる。即ち、「白徒」が目立てばそれは流紋岩質なので、他の付山タイプに比べて地下水位が低い目印になると思われる。

⑫赤壤勢山と⑬陞山白壤には、明らかに土質を示す「赤壤」「白壤」の語がある。従って「勢」「陞」が、山容を示すと考えよう。

「勢」は『説文』に「健也」とあり、その「健」をまた「伉也」とする。従って山容に丸みが無く傾斜角が急で、直立しているように見えるが、表層は岩体でなく、赤い土に覆われている山、ということになろう。土色の赤は母材の鉄分含有を示すこと、前述した通りである。前節で検討した「勢II小石」の仮説に従う場合と比べて、形成されてからより長期間が過ぎ、化学的風化が進行した状態と考えればよい。

⑬の「陞」字は問題である。『管子』には拙稿hで述べた如く、他書に見えない文字も多いが、さりとてそれ

を直ちに「筆写の誤り」で済ませてしまふことは、できる限り避けたく思う。が、訓詁の手がかりが無い以上、類似する他字から推定してゆかざるを得まい。王紹蘭は「陞」を「陞」の譌と見て、陞は磊であり衆石の意とする。これも可能な解釈ではあるが、本節では山容の形容として訓む道を探ってみよう。声符と思われる「坐」を『説文』は「止也。从留省从土。土所止也。此与留同意。」とする。白川静氏は、この『説文』の解を否定され、神を祀る土主の左右に二人が坐する形で、訴訟の席に連なること、当事者となることだと云われる。『説文』の説く所を推せば、中央に土の堆積があり、その左右に土が広がってゆきそうでゆかない状態を表現していることになるだろう。白川氏の説かれる所は、無論文字発生の原義を論じておられるのだが、氏の釈されるように文字が発生したとして、山容の形容にこの文字が利用されているならば、やはり中央の土主と両側に坐する二人総体の空間的配置の形を仮りたと考えられるのではないかとすると、両説とも凸状の形容とみなしうるように思われる。扁の阜は、無論丘陵地であることを示そう。従って「陞」は、一般に山と云えば思い浮べる円錐状ないし角錐状ではなく、山の中腹で傾斜角が変化する形、中央

が高くて三〜四合目から頂上までは急傾斜なのだが、山麓付近ではなだらかな台地状をなす山、ということになりはすまいか。その山の表層は、第三節に述べた如く白壤——優白色火成岩の物理的風化による砂質土——であり、取水は不可能なものの、地下水の存在は確認できるのである。ということは、地表水を浸透させるだけの亀裂のある可能性が高い。となれば、下層に浸入した地下水の働きで深層に起る化学的風化や、一般の地震等によっても、更なる亀裂の拡大は当然予想される。かかる亀裂に沿って、あるいは不規則に発達した節理に沿って、岩盤ブロックが落石したり、山体の一部がまとまって崩落することは、しばしば見聞できる所である。かかるケースにおいて、山頂部には残積性の岩体が吃立し、山麓部には崩積性岩体が落下の衝撃によって碎かれて堆積することになる。こういう現象がたび重なれば、山容全体は「坐」字形——凸型を呈すのではないか。あるいはまた、「挫」字の「くじく」に類似した用法で、かような山体の落盤現象を「陞」と称したとも考えられよう。即ち⑭徒山や⑨付山白徒の「徒」字が、垂直に切り立つ絶壁の形容であるのに対して、日本語では同じく「けわしい山」であっても、「陞山」はゴツゴツと、諸方に

崩落の跡を示す小断崖を有す山の形ではないか、と思われるのである。

六 どこで井戸を掘ったか

さて、残る「陵」字のつく呼称の検討に進もう。⑮高陵土山の「高」字と、⑩中陵の「中」字とは、この十五条の命名原理を山容の形容と仮定する限り、「低い陵」に対する中・高と考えるのが常識的かもしれない。

が、そう判断するには、まず「低陵」とみなしうる呼称が記されているか、否かを、確認しておく必要があるだろう。

④⑤⑥条全てに「陵」字はあるが、「杜」「延」「環」とも、直ちに「低」の義を見出しうる訓詁は認めえない。形態を示す文字として杜・延・環を考えるなら、「環」は云うまでもなく玉環の形——夏緯瑛氏も主張されるように、ぐるりと円型に廻る、の意だろうし、「延」は蔓延の延、長くうねうねと延びた、の意となろう。こういう解釈の類型で「杜」の義を求めれば、「延」や「環」は、いくつもの起伏を総称しうるのに対して「杜絶した」、つまり平原中に一つだけこんもりと在る丘、ということにもなるうか。しかしながら、かかる形態の差

異と地下水位の変化とに、いかなる関連性を見出せるだろう。「杜陵」や「延陵」が、地員篇編者と編者の予想する読者にとって、直ちに理解できる固有名詞でない限り、どの形態の丘陵でも、地域によって地下水位はマチマチであるはずだ。また、どのような形態であれ、丘陵の山体が地表面に占める面積はかなりの広域となろうが、その中のどの地点を基準に地下水位を考えるのだろう。山頂であろうか。が、延陵・環陵を先のように解する限り、長く続くであろう稜線の、どこを頂上と定めるのだろう。延陵・環陵の尾根線全体に亘って、同一地下水位ということはあるまい。となれば、以上述べてきたこと、どこかに誤まりがある、と考えざるを得ないのである。何が問題なのだろうか。

近年「陵」をめぐる興味深い論争がある。といっても、本稿で考えているような字義や自然地理上の問題ではなく、周初、齊太公呂尚が封ぜられたという「營陵」の位置比定をめぐる論議である。『漢書』地理志が齊郡の条に「臨淄、師尚父所封」とし、別に北海郡の条で「營陵。或曰營丘」としたにも拘らず、応邵がこれに注して「齊獻公、自營丘徙此」として以降、様々な解釈を生み、近年では臨淄説・昌樂説・益都県説・寿光県説

等々がある。が、ここで取り上げたいのは無論それらの主題たる「營陵」がどこか、ではなく、「營」字の解釈に関する張建華・鄭重華両氏の説である。張・鄭両氏は、

營丘Ⅱ營陵Ⅱ緣陵Ⅱ昌樂県南四十里の白浪河沿岸遺跡とする立場だが、両氏の立論の根拠は、「營」「緣」ともに「繞」の意であると解し、「營陵Ⅱ緣陵」とは「一孤山獨立」ではなく、「群丘緣繞の義」だと見る点にある。「營丘」の所在としてこの説が是か否かは、本稿で立ち入るべきではないが、張・鄭両氏の見解、即ち「一山」「一陵」と呼ばれる地名が必ずしも山岳丘陵それ自体を指すとは限らず、その付近の平地、「營陵」であれば「陵に繞まれた平地」つまり盆地を指す、との解釈には、多くの示唆が含まれていると思われる。固有名詞の地名には様々な由来があるが、その土地の地形的特徴を以て近隣の人々が呼び慣わしていたものが定着するケースは多いだろう。おそらく山東省在住と思われる張・鄭両氏が、近隣の土地であったことを念頭に置きつつ、「營陵」「緣陵」なる呼称が丘陵ではなく、丘陵に囲まれた盆地を指す、と考察されたことは、そのような命名法・語法が、近隣の土地のものとして自然だと判断しておられるからであろう。「營陵」「緣陵」が盆地を指すケースがありう

るならば、「環陵」も同様に周囲を丘陵で取り囲まれた盆地、とみなしうるのではあるまいか。即ち、丘陵に囲まれた平坦地ということになる。

今まで述べてきた所は、各条の呼称が指す土壌の在る場所を、漠然と山陵の山体上のどこかとして論じてきた。夏緯瑛氏の説は、それを各山、陵の頂上地点と規定しての立論で、各条について海拔を指標とされるのも、その前提に立ってのことであろう。が、このような夏氏の論法に対して友于・李長年両氏は異を唱えておられる。即ち、地員篇の記述の基になった地下水位調査は、山頂から計算したものではない、とする。「實際問題として、当時の条件で、一つ一つの山の頂上から井戸を掘って地下水位を量るなどということは、必要でもないし、不可能でもある。人々が居住する山下の緩斜地で——北方の人は多く井の傍らに居住するから——これらの資料を得たのである」と。この指摘は、一面洵に正鵠を射ていると云えよう。地下水位計測地点が山中でなく、山下にもありうると考えるのは確かに合理的である。ただし、両氏の所論は、地員篇の記述を関中の描写だとするものであり、この十五条は関中平原北部の郃陽・耀県等の一帯にあてはまるとして、その地の群丘は連綿と並び、山勢

が次第に高くなれば地下水は次第に深くなり、地質も土質から次第に石質へと変化する、と述べる。即ち友・李両氏も、地員篇の述べる地下水位が、地表面の高低差に連動するものと見ているのである。これは、いかにも不十分な見方ではあるまいか。

前述したように、地員篇の後文F-Jは、明らかに山地土壌を述べているが、まず地形によつて「山之上」「山之材」「山之側」の別を立て、「山之上」については更に三分して「縣泉」「復呂」「泉英」なる土壤名を与えている。従つて、これまで述べてきた各呼称のうち「山」字のつくものについては、各々の地質ないし形態の「山之下」、即ち山麓緩斜地・平坦地を指すものと考へうる。しかしながら「陵」字については、「高陵土山」の下、「中陵」の下、に対して「低陵の下」では済まされない、地形別の変化が認められるからこそ「杜陵」「延陵」「環陵」の別が設けられているのではあるまいか。かく考えて再び「杜陵」「延陵」を見る時、まずは「杜」字について、『方言』に「杜、根也。東齊曰杜。」とあることが想起される。『説文』は杜を「甘棠也」と、植物名にしか解していないが、白川静氏は金文字形によつて「土の上に叉枝状のものを加えた形(𣎵)で者の

上部(生)と同じ構造である。者は堵、遮る意の字である。」とされる。「杜陵」の示しうる地形は、『方言』の解釈を用いれば「陵の根元」、まさに起伏が始まらんとする丘の麓の地に相当しよう。かかる土地は、陵下の平坦地から視る者にとつて、眼の前を陵によつて遮ぎられている地点であり、「土盛り」そのものである陵中の土壌とは隔絶した地質からなつていて、平坦地に対する陵の傾斜角が大きい地形を想定すべきだろう。これに対して、陵下の平坦地と丘陵の稜線とに明確な分岐点を見出し難く、だらだらと緩傾斜が連なつている地形があれば、これを「延陵」——丘陵が続いているかのような緩斜地——と呼びうるのではなからうか。

④⑤⑥がかような地形だとすると、地下水位の差異は、何故生じているのだろうか。

本節冒頭で地員篇の「陵」を、「平地」よりは高いがなだらかな地形、と仮定した。かような土地——丘陵地の形成過程は、大別すれば三通りになると思われる。⁽³⁶⁾

(一)、新輪廻の山頂低起伏面。つまり第三紀末以降に隆起した所だが、隆起量が少なかった所、いわば山地の小規模なもの。

(二)、洪積層丘陵・新第三紀層丘陵・火山山麓丘陵。前

二者は、平原状だった原地形の比高が小さく、地質が軟かいので、侵食が速く進行して丘陵となったもの。

(三)、古第三紀以前の岩類 (花崗岩・流紋岩等)・前輪廻の低起伏地。つまり、以前は起伏に富んでいた土地が、次第に平らになっていく過程の丘陵で、深層風化——殊に花崗岩のマサ化など——を受けている例が多い。

この他、古代中国地域に固有の現象として、黄土質土粒の風成堆積により、山間の窪地が埋められ、比高が相対的に低化したケースを⁽³⁷⁾考えておく必要がある。これを、(四)、山間低地の風成堆積による山地の丘陵地化。

とでもしておこう。(一)のケースは古代中国地域では極めて稀である。

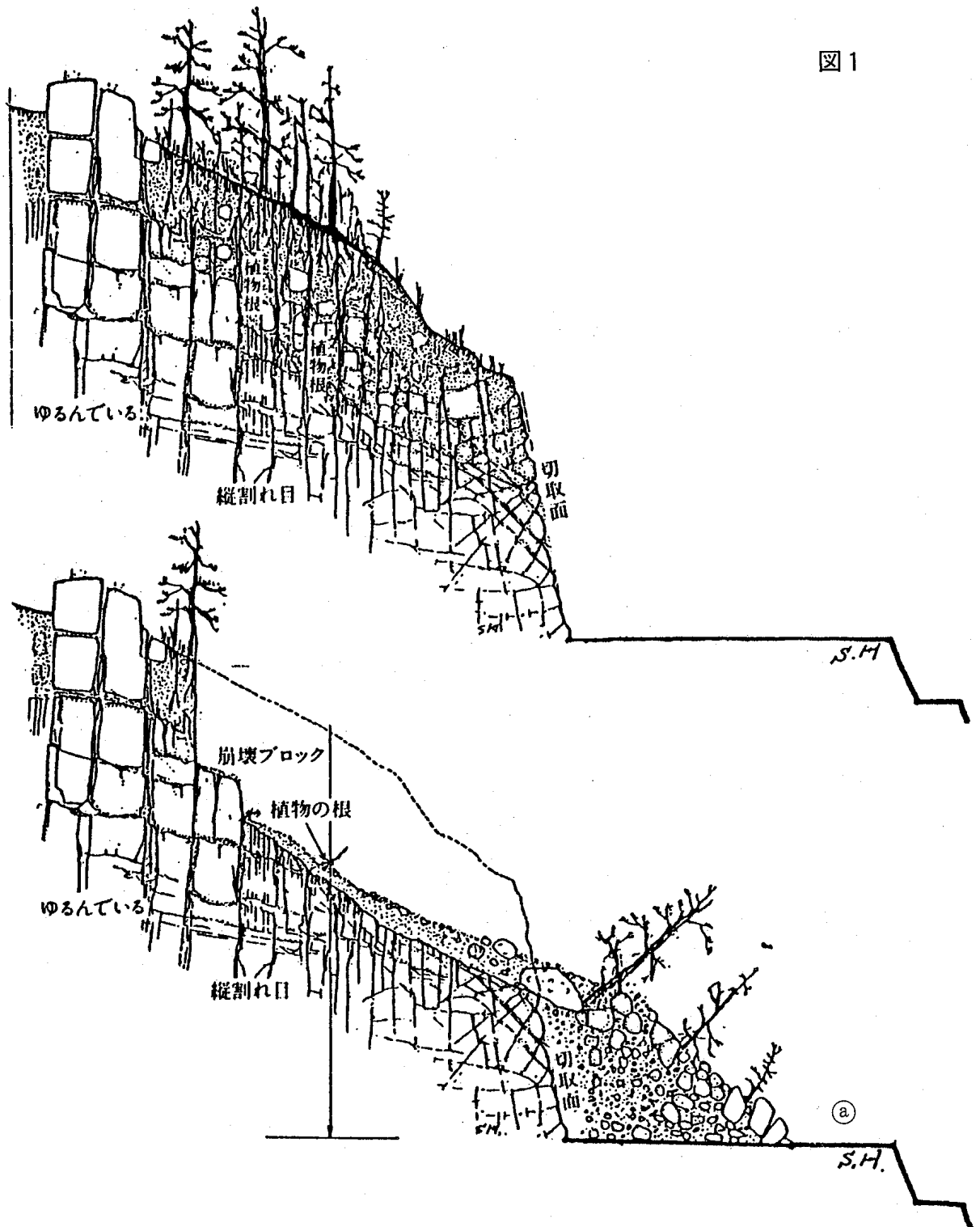
「杜陵」の如き形態をとりうるのは、(二)もしくは(三)のケースであるが、(二)の場合、丘陵の直下は川もしくは降雨時に地表水が流れて川となる場所である。地下水位を問題にするような利用法が取られている土地とは考えにくい。となれば、(三)の、古第三紀以前の岩類が、次第に風化を進めている地形ということになる。この場合、図1に示すように、杜陵すなわち丘陵の直下と見える場所

②は、実は風化した崩積土の堆積の末端である。原地形の頂上より低くなっている残積岩の頂上に降った雨は、原地形の表層の上・崩積土堆積の下を流れ、堆積の尽きる場所で原地形の表層に出てくる場合がある。これは湧水となるわけだが、かような基本の上に更に完新世になって以後の風成堆積、即ち(四)を形成する作用が加われば、この湧水が地下水となる。広域で見れば、海浜や沖積平野に比して深い地下水位であつても、丘陵付近の土地の中で比較的浅い地下水が得られるのは、意外にも比較的急傾斜の裾野ということになる。

これに対して、「環陵」即ち盆地を形成している周囲の丘陵の形成過程はどのようであれ、中央の盆地自体は周囲の丘陵からの崩積土が集中することになる。これに(四)の要素も加わろう。周囲の丘陵の外側と盆地とを比べると、より低地へのクリープ現象が考えられる外側より盆地の方が堆積層は厚くなる。また、日本のように多雨の土地では、一般に盆地における涝害が問題となるが、これは地表水が盆地中央に集中する結果、自由地下水面が上昇し、懸垂水帯と毛管水が連結した状態になって過湿となるからである。日本と異なり、乾燥地帯でかような自由地下水を汲み上げると、オーストラリア大鑽井盆

図1

『管子』地員篇の山と丘陵地帯



地の例を引くまでもなく、アルカリ化の危険性が高い。従つて、盆地表面の堆積層からではなく、原地形の地下水であつた岩盤の下まで、深井戸を掘り被圧地下水を得る必要があるわけである。⁽³⁸⁾

「環陵、十一施」とは、かかる特殊条件における被圧地下水脈の水、つまり掘り抜き井戸の開鑿を指示したものとと思われるのである。

これらに対し、「延陵」は、(三)の中でも、前輪廻の低起伏地が、次第に準平原化してゆく過程であると思われ、崩積土堆積も厚くなつて残積土の頂上との比高が減少していると思われる。「杜陵」に比して、深い地下水位となるのは当然であろう。

かく見てくる時、④⑤⑥条は、比高が中・高に対して「低」である、といった単純な山体の形容ではなく、陵下の地の形成過程に関わる地下水文の実態を、陵周辺の地形を材料に推定し、利用する地下水についての指標となしうるような名称であることが見えてくる。頂上の標高など全く関係が無いと云えよう。となれば、本節冒頭に提示した⑩中陵と、⑮高陵土山を、比高の程度によるものとの仮説もまた疑わしくなる。

地員篇には、本稿で扱う十五条の他に、実はもう一ヶ

所「陵」字を記す文がある。それはM条の「若在陬陵之陽、其左其右……」との句である。郭沫若氏は、この文を、「陬」字で断句とすべきだとする。即ち「もし陬に在つても、陵の南に在つても……」との意に解するのである。また張佩綸はこの語順は意味をなさず、注の残入であるから「陬陵之陽」の四字を節去せよ、とする。このような解釈を生ずるのは、両説とも「陬」を「隅」の意に取つた上で、一つの山体の中の入り込んだ向斜面だと見たためであろう。しかしながら「陬陵」と「中陵」とこそが、対になる概念ではあるまいか。この十五条に記された呼称は、いずれも、特徴ある山陵の裾野に位置する平坦地ないし緩斜面に存在する土壤の呼称である。

独山の如く一つポツンとある丘陵ならば、その麓は「杜陵」となるうが、通例の丘陵は、いくたびかの起伏をくり返しつつ稜線が続く。その丘陵群の尽きる所が「陬陵」であり、左右に他の丘陵が連なっている丘陵が「中陵」なのではあるまいか。⑩条は、既に付山や徒山など、「山」字のつく呼称の序列の中にある。従つて「中陵」なる呼称は、他の「山」のそれと同様に「山体の麓」を⑩条では意味していよう。左右に他の丘陵があれば風食は少なく、風化は遅くなるう。中陵の麓の地——即ち稜

線に対して垂直の位置にある裾野は、崩積土の堆積も薄く、原地形を構成している岩盤も風化を進行させていないなら、地下水はその岩盤の下層に存在すると思われるのである。

⑮高陵土山は、洵に文字通り、「陵」と呼びたいほどなだらかなのに非常に高く、しかも「土」と見えるもので覆われている山、であろう。かような「山」は、非常に古い地質年代の巨大な花崗岩体で、全体にマサ化が進んで珪素に富んだ粘土と化していて、山麓の表層にも粘土が崩積土として沖積土に若干混和し堆積しているのだろう。従って地表面の透水性は悪く、山体外から続いている地下水脈を探り当てねばならないのだと思われる。

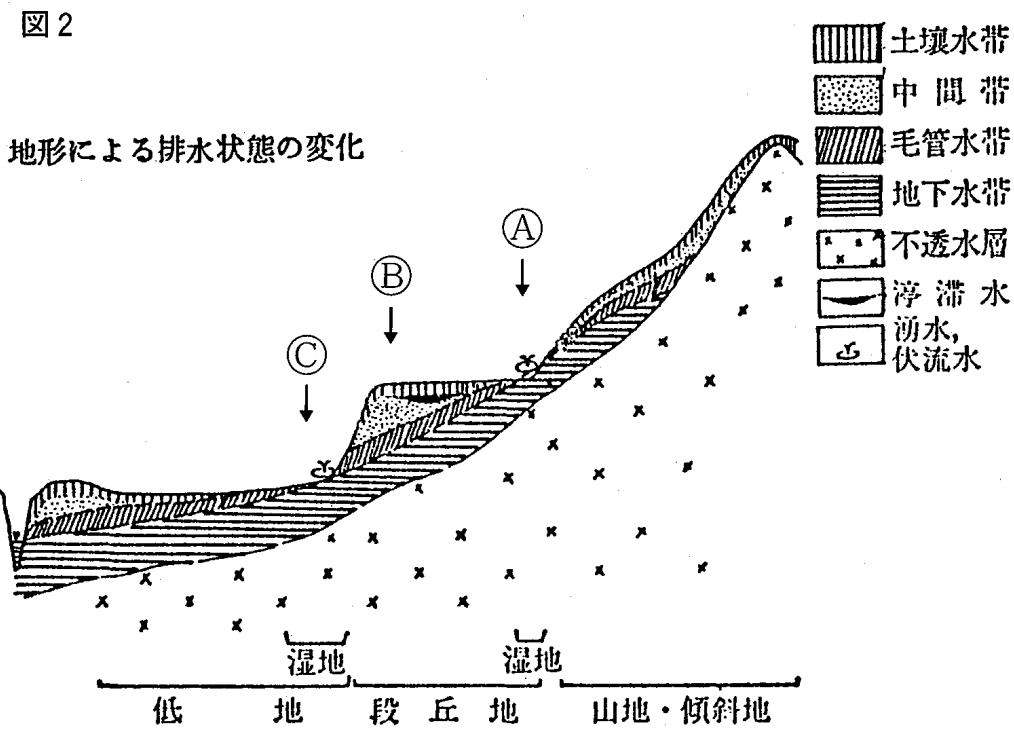
以上述べてきた所で、この十五条の叙述の方向は、率ね浮び上つてきたと云えよう。すなわち、叙述対象は、平坦地ないし緩斜面であるが、その地の位置する地形によって、地下水位を指示し、地形の特徴の中核をなすもの——例えば山——を採って呼称としているのである。かく考えれば、③陝之芳・④祀陝についても、理解の手がかりが得られよう。

前述したように、「陝之芳」を「陝之旁」と訓むことは賛同できる。⑤以下の叙述対象が平坦地であるなら、

「陝之旁」も離江下りの辺りの如き断崖絶壁とは考え難い。河岸段丘のいずれかの地点であろうが、氾濫原の広い河川の段丘面は、山側と谷川とで地下水位の異なるのが通例である。図2に示す如く、堆積地形である段丘面の山側①は地下水位が浅く湧水も稀れでない。これに比べ、まさに陝谷のすぐ傍らの地点②では、地下水位は深くなる。山側の湧水と眼下を流れる川とに挟まれ乍ら、河岸段丘の谷沿いの地点の地下水位が意外に深いことを示したのが②条なのである。隅々通りがかりに水を得るためなら、③点上に現れる湧水で事足りるかもしれない。が、段丘上の生活——飲食・農耕等に必要の水を継続的に得んとするなら、谷底からの揚水は、あまりに苛酷な労働になる。平地より少しだけ深く掘ればきれいな地下水が得られる、との一般方則を示すのが、「陝之芳、七施」の義であろう。

では、河岸段丘上よりも更に深い地下水位とされる「祀陝」とは、何であろうか。

「祀陝」を『説文』は「祭無已也。从示已声」とするが、白川静氏はこれを斥ける。ただ、隣の「已」について、『説文新義』³⁹においては「已は胞子の象」とされるものの、『字統』においては「卜文・金文の字形は蛇



に従うており、自然の精霊などを祀る意である」とされる。さらに「祀は古くは蛇形の神、わが国でいう夜刀の神であった。夜刀はやつ、谿谷の意である」とも述べられる。

かかる文字が「陝」に添えられる時、王・夏両説の如く「阨陝」と、或いは友・李説の如く更に「阨陵」と改めずとも、「蛇のように曲りくねった」或いは「祭祀の対象ともなりそうな神秘的景觀の」陝谷、といった解釈も或いは可能かもしれない。が、これまで見てきたように、この十五ヶ条に記すところは、一定の広がり・面積のある平坦地乃至緩斜地だと思われる。延々蛇行する陝谷、といった漠然とした景觀を意味するのでは、第二節にも述べたように、その景觀を構成する諸種の地形の何処が叙述の対象なのか不明になる。しかもこの「祀陝」の地は、河岸段丘の崖際よりも深く、丘陵の麓よりも浅い地下水位の土地なのである。

「祀」字には、『説文』の解の他、「無己長久之辞」「似」「侵」といった様々な訓詁もあるが、さしあたり「己むこと無し」ならば「終らず続いている」ことになりう。陝谷が己む・終るとは、谷の兩岸を形成していた山陵が尽き、平地になる地点——谷の出口である。谷は

地表上の低所であるから地表水を集積するが、無論全ての谷底を川が常時流れているわけではない。以前は川だったのに現在は水が無かったり、両崖が無くなるると共に川も消えていることがある。云うまでもなくこのような地形は、川が流れていた時に運んだ土砂が傾斜の緩くなった地点——谷の出口に堆積し、扇状地ないし崖錐を形成することで出来上る。陝谷を流れていた川は堆積物の下を流れて伏流水となり、扇状地が尽きる地点で再び地表に現れる。「己む無き」陝とは、この扇状地の堆積層を指すのではあるまいか。扇頂・扇端部に比して、扇央の地下水位が低いことは、中学校地理の領域だから周知のことであろう。この伏流水は、もはや陝谷ではないはずなのに、地下で「己むこと無く」続いて扇端に表れるから、陝谷の川に「似た」ものであり、大地の側から視れば、平野が川に「侵されて」いるとも云えよう。白川氏が説かれる金文・卜文の「己」字(己)は、陝谷が急に開けて扇形の緩斜地を構成するこの地形の全体図に酷似する。現行文字の用法とも「本義」とも隔たつてはいても、かかる字形を地形の説明に用いることはありうるのではないか。管見の限り、古代中国の文献に、扇状地の概念を示す用語が見当らない。地員篇の素材となつ

た元々の記載では、「祀陝」は文字で表されていないかった可能性もある。扇央の土壤は当然乍ら礫が多く、扇頂、扇端に比して地下水位が深いので、日本でもしばしば干害に見舞われる。かかる状況を「祀陝八施」は示していると思われるのである。

さて、延陵の「延」を、ごく常識的に「延長」の延と見るならば、①墳延は、どう理解すべきであろうか。

第二節に述べたように、『周礼』鄭注は、「墳」を「水崖」とし、「衍」に対比させている。即ち「墳」は河岸段丘、「衍」は沖積地との対比である。この解に尽きるのではあるまいか。地員篇は、土壤を充分に観察しており、河岸段丘を構成するのが洪積土であることも、名称や来歴など判らずとも、その実体をそれとして認識していたはずである。

従つて「墳」は洪積土壌そのもの、M条に見える「墳」は洪積土から成る丘陵の義だと思われる。「墳延」とは、洪積土が長く延々と伸びている平坦地、即ち河岸段丘そのものを意味する。沖積平野を基準とすれば、さしあたり次に「低い」地、つまり小高い土地の第一番目、ということになる。 「墳延」が長く洪積土壌の続く、河川と陸地とのなす角が緩かな地形全般を指すのに比し

て、次条「陝之芳」が、やや山勢が急な地に見られる段丘平面上の特殊点における地下水位の深化を述べているのは、甚だ妥当な記述次第だと思われるのである。

七 「丘陵」叙述の意義

以上に述べたことから、この十五条については、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿までが、地形的特徴によって標高差と関わりなく生じる特殊な地下水位を示し、⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿までは、山麓地帯について、その山の特徴によって知りうる山麓の地下水位を示したものであることが、明らかに became と思われる。

では、本稿第三節に述べた、各条の呼称がその地の構成要素・産物を述べているのではないか、との仮説に基づき解釈は、全く無駄な文章だとの御指摘を蒙るかもしれない。しかしながら、そうとばかりは云えない可能性も考えられるのである。表Ⅲは、三、四、五節に述べた私見をまとめたものであるが、⑥までは、この構成要素による検討は殆んど無意味に近い。ところが⑦蔓山以降についてみれば、地形から予想される構成体と、構成体から予想される地形とは全く矛盾しない。否むしろ、構成体の物質に関する予測がつかない限り、例えば「勢Ⅱ健Ⅱ位」と「徒」の区別はつき難いと思われるのである。

「墳」「瀆」「墮」三字に即して述べたように、地員篇編者の物質に対する観察は、極めて正確であり、かつ、その把え方がいわば即物的である。類型化・抽象化による概念の形成よりは、現象の素朴な記録を志向したのだろう。事物の多様な側面をできる限り盛り込みうる文字が選ばれているのではあるまいか。既成の文字が見つからなければ、何らかの記号や略図でさしあたり書き留めた可能性も捨てきれない。

かかる記録は、何のためになされたか。本稿で扱った前半部に関する限り、それは無論地下水位についての調査報告で、第一義的にはあったと思われる。その報告が現行地員篇に編集される過程については本稿では述べないが、やはり冒頭の「夫管仲之匡天下也、其施七尺」がポイントであっただろう。翻つて、地下水位調査自体は、何故行なわれたのだろう。友于・李長年両氏は、これらの調査が既住の土地の既設の井戸を使って実施されたものと考えておられるようだ。そうである場合もありうるが、全てとは云えないのではあるまいか。疑問を呈す理由の一つは、夏緯瑛氏が「十五地点どこも大差ないからだろう」と受け取っておられる植生についての記録を欠く点であり、いま一つは、「不可得」とする「泉」の記

表Ⅲ

原文	形態	産物・構成要素	地名	
			音通・字形	意味的関連
①墳延 42尺 42×23=9.66尺	水崖＝川岸段丘 cf 衍…沖積地	(洪積土の延長)		
②陝之芳 49尺 11.27	川岸段丘の水際	——		
③祀陝 56尺 12.88	扇状地の扇央	——		
④杜陵 63尺 14.49	杜絶した 丘の根・麓	トウマメナシの木のある	☆杜山	
⑤延陵 70尺 16.1	丘の稜線の延長	——		○蛇丘
⑥環陵 77尺 17.71	ぐるっと廻った丘 盆地	環を出土する	△瑕邱 △園丘(圓丘) ☆縁陵	
⑦蔓山 84尺 19.32	なだらかな	蔓草の茂った		□連綿山
⑧付山 91尺 20.93	付＝浮く…ぽっかり 浮んだ トロイデ型の	坩＝白石英＝浮石 桴用の雑木のある	◎符山 ◎伏山 ◎浮山 ◎跋山 ☆丹山(凡山) ♠累山 ♠福山	
⑨付山白徒 98尺 22.54	流紋岩の白い崖のある トロイデ型の	浮石 流紋岩	□浮来山 ●福山 ■浮峯山	
⑩中陵 105尺 24.15	丘陵群の中央に位置 する	——	□中邱	▽三柱山 ☆三山
⑪青山 112尺 25.76 青龍之所居、庚泥、不可得泉。	石灰岩質で青く見える	石灰岩質の 青龍＝化石、庚泥＝未 固結泥土	◎4青山 ◎2蒼山 ♥青山 ◇青山 ★青山 ▲青山 ◆小青山 ■青山	
⑫赤壤勢山 119尺 27.37 其下青商、不可得泉。	垂直に屹立した	鉄を含む粘土(＝赤壤) と小石の 礫＝小石の多い (丹青＝藍銅鉱)	♣熬山 ◎勢山衛 ◎赤山	□丹山
⑬陸山白壤 126尺 28.98 其下駢石、不可得泉。	挫けた＝崩落を起し た 花崗岩質の砂質土	砒＝好雌黄(薬石) (白壤＝Si)	☆萊山 ●鐵錐山 ■馬鞍山 ★之萊山 ■天柱山	
⑭徒山 133尺 30.59 其下有灰壤、不可得泉。	峻険な	徒＝土？ (灰壤＝白墨)	◎徒山 ♥徒山 ♠土山 ◎土山	
⑮高陵土山 140尺 32.2	高いなだらかな 粘土質の丘	カオリナイト＝粘土質	◎土山 ◎高陵鎮 ▽建陵山 ♠土山	

表中の記号 水経注

○汶水 △泗水 □沂水 ▽流水 ◇巨洋水 ☆淄水 ♠膠水

萊州府志(民国28年重刻・永厚堂刊)

●萊州府 ★平度州 ▲昌邑縣 ▼濰縣 ◆高密縣 ■即墨縣

◎山東省地図(1990年) ♣読史方輿紀要 ♥山東萊陽盆地地層古生物

載である。洪積地は無論のこと岩山にも植物は育つ。巍峩たる花崗岩体の泰山にも薊や吾亦紅はもちろん、松柏がそびえている。十五地点の多くに植物は繁茂していたと思われるが、地下水位調査者の眼に止まる既知の植物——報告者の生活様式の中に位置付けられていて記録に値すると判断しうるような植物に、相遇しえない地が多かったのではあるまいか。A—E条を執筆した者なら当然関心の中心であったはずの農林業が、これらの土地の幾つかの地点では盛んでなかったとは考えられないか。営まれていたのはまず鉱業だろう。云うまでもなく、殷代から銅の採掘がなされていなければ、花やかな殷周青銅器文化は生まれようがなかったはずだ。誰かが鉱石を掘っていたのである。銅や鉄・丹朱の鉱山があり採掘がなされていたればこそ、「利用してはいけない」地下水の存在も確認できたのではあるまいか。重金属の被害は一朝一夕で認識しうるものではないのだから。青山や陞山白壤については、地下水位を湧水等から推定しえたかもしれないが……。

いまひとつの可能性は、牧畜業である。地員篇後半部には見られる牧畜への言及が、前半部には欠けている。が、「祀陝」において既にアルカリ化している盆地があ

れば、⁽⁴⁰⁾紅草など塩好性草類が生ずる、これは羊の好物であるが、農業にとつては阻害要因でもあり、⁽⁴¹⁾経営立地として不適な証左でもある。

南朝梁の『地鏡図』に至ると記録に表れる金属指標植物についての記載もない。『管子』地数篇には、黄帝と伯高の問答としてと、桓公と管仲の問答としてと二条、「上有丹沙者、下有黄金。上有兹石者、下有铜金。上有陵石者、下有铅锡赤铜。上有赭者、下有铁」といった重金属の複合的産出原理を定式化した問答があるが、この十五条の場合も、鉱区は鉱区として把握したために、植物の記載を欠いた可能性がある。

関心の中心が水にあるのは、かかる非農業地帯であっても人が住んでいれば、最低限、為政者（の出先機関）の設営が必要だったからではなからうか。この十五条は、従来為政者の直接的支配の対象として認識されなかった⁽⁴²⁾鉱区や牧畜区に、支配の眼が向かい始めた状況の一スケッチかもしれない。

とまれ、僅かの文字を取り上げて駄弁を連ねてきたが、実は以上の考察全てが、全く無意味になるかもしれない事情がある。それは表Ⅲに付した諸地名の存在である。十五の呼称と同一文字、または仮借・音通なり、字型の

類似による誤記等を考慮すれば同じ語かもしれない地名が、山東省に限ってもこれだけ見出しうるのだ。各時代の地方誌等をいまま少し調査すれば、更に多く存在するかもしれない。十五条の呼称が、これらの特定の地を指す固有名詞であつたなら、本稿の所論は、出発点から見直さねばならない。

しかしながら、例えば、朱治田『古齊都地名伝奇⁽⁴³⁾』と
いった読物を繕くだけでも、地名がどれほど変化するものであるかは理解できる。全く別の名称であつても、本稿に論じた地形・地質の存在を暗示する地名も、逆に見出すことができるのである。十五条の呼称と似通う地名の存在は、地員篇がそれらの固有名詞を用いていると見るよりも、古今の地名の方が、地員篇が扱えたと同様の土地の特徴を以て名付けられた、と考える方が、自然ではあるまいか。これらの地名の存在は、地員篇と山東、とりわけ淄水・泰山・沂水以東の膠東半島地区との関わりが深いものであることを、物語るかに思われるのである。

注

(1) 『管子』研究の現状と課題」(『流通経済大学論集』一九一、一九八四年。以下、拙稿aと略記する。他も同

『管子』地員篇の山と丘陵地帯

様)。「管子」地員篇における土壤認識の一側面」(『中國古代史研究・第五』一九八二年。拙稿b)、「管子」地員篇における樹木の位置」(『中國古代史研究・第六』一九八九年。拙稿c)、「管子」書中の樹木について」(『陶沫集・六』一九八九年。拙稿d)、「管子」地員篇の葉草について」(『中国の歴史と民俗』一九九一年。拙稿e)、「管子」地員篇の粮食作物」(『学習院史学』三〇一九九二年。拙稿f)、「管子」地員篇の「雑草」」(『响沫集・7』一九九二年。拙稿g)、「管子」地員篇の土壤評価基準」(『流通経済大学論集』二六―四、一九九二年。拙稿h)。

(2) 本稿に引く『管子』本文は、影宋楊忱本とされる四部叢刊本による。原則として文字校訂は行わない。その理由については拙稿aに述べた。

(3) 王紹蘭『管子地員篇注』(二八九一年胡燏棻校・寄虹山館刊本。なお、この版には、「延陵」についての注を欠く。しかしながら、『管子集校』の当該部分には、王紹蘭説として「史記吳世家『季札封于延陵』、延陵之名昉於此。』なる一文を載せており、他の版本の存在が予想されるが、未調査である。以下、王紹蘭説は全てこれに拠る。)夏緯瑛『管子地員篇校釈』(一九五八年。以下、夏緯瑛説は全てこれに拠る。)友于・李長年『管子的重農学説和水利土壤知識』(中国農業科学院・南京農學院、中国農業遺産研究室編著『中国農学史』第五章。一九五九年。なお、友于氏の地員篇に関する論は、『農史研究集刊』第一冊所収の「管子地員篇研究」等、他にもあるが、本稿

で扱う部分についての所説は、この李長年氏との共同論文に集約されているので、以下、本稿に引く友于説は全てこれに拠る。

(4) 『中国古代土壤科学』一九八〇年。なお、本稿で扱う十五条に関する王雲森氏の説は、後述する「墳延」についての解釈以外、率ね夏緯瑛説に拠っているので、表中に収めなかった。

(5) 現行の十三經注疏本『左伝』は「郟有二陵焉。其南陵……」に作る。

(6) 張宗祐・張之一・王芸生『中国黄土』(一九八九年)等に、黄土の再集積過程に関する新しい報告・分析があり、アンダーソン『黄土地帯』以来の諸「常識」は、変更を余議なくされつつあるようだ。

(7) 『管子学』(一九六八年、手稿影印本による)。

(8) 陶山国男・羽田忍『現場技術者のためのやさしい地質学』(一九九一年)

(9) 本稿の性質上、行論の対象地域を限定することは重要であるが、地員篇の叙述対象地域自体が論争の焦点でもあり、軽々な限定は避けねばならない。そこで、地質学・地理学上の検討において必要な場合には、さしあたり、遅くとも『管子』と呼ばれる書が存在したと思われる後漢初めごろまでに、各王朝の主たる政治支配地域となつたと思われる揚子江以北・甘肅・四川以東の辺りを「古代中国地域」と仮称して、考察の範囲としておく。

(10) 以下、地質学関係について、特に註記しない場合は、註(8)前掲書の他、土壤調査法編集委員会編『野外研

究と土壤図作成のための土壤調査法』(一九七八年)、羽田忍『土地地質学入門』(一九九一年)、大久保雅弘・藤田至則編著『地学ハンドブック・新訂版』(一九九二年)、三木幸蔵・古谷正和『土木技術者のための岩石・岩盤図鑑』(一九八三年)を、主に参照した。

(11) 包括的かつ比較的新しい土壤学用語を知りうると思われる、熊毅・李慶遠主編『中国土壤』第二版(一九八七年)においては、暗棕壤・漂灰土・灰黒土・灰褐土に分類されている。

(12) 以下、白墨については、莫如爵・劉紹斌・黄翠蓉・張光荣・譚冠民・王宝嫻・肖祥章編著『中国石墨礦床地質』(一九八九年)による。

(13) 中国全体の地質構造・造山運動等については、佐藤信次『中国の地史』(都城秋穂編『世界の地質』一九九一年第一〇章)を主に参照した。

(14) 郭沫若・聞一多・許維遜編、一九五六年。なお金谷治氏の説かれる所(『管子の研究』一九八七年)に拠れば、この書における本文校訂の最終責任は、やはり郭沫若氏の取捨に拠るものと思われる。

(15) 『字統』一九八四年。なお、以下に引く白川氏の説は、特に付言しない場合、この書による。

(16) 例えば『神農本草経』一九五八年人民出版社影印本は、卷二「上品」に、空青・曾青を載せる。

(17) 佐々木昭・石原舜二・関陽太郎編『地球の資源・地表の開発』(一九九二年)等による。

(18) 森本信男『造岩鉱物学』(一九八九年)。

- (19) 以下、中国の銅鉞床については、夏湘蓉・李仲均・王根元編著『中国古代礦業開發史』（一九八〇年）による。
- (20) 難波恒雄『原色和漢葉図鑑』一九八〇年。
- (21) 周光裕主編『山東森林』一九八六年。
- (22) 周仁・張福康・鄭永圃「我国黃河流域新石器時代和殷周時代制陶工藝的科學總結」（『考古學報』一九六四—一期）
- (23) 註(10) 前掲『岩石・岩盤図鑑』によれば、日本における類似の地層は、三波川變成岩のうち埼玉から群馬に在るものようである。
- (24) 註(20) 前掲書。
- (25) 註(19) 前掲書。
- (26) 註(10) 前掲『土壤調査法』において「地形面の意義」を執筆された浅海重夫氏は、「山地は地球上で現在土地を上昇させる内営力の働いている所」であるのに対し、台地は内営力が微弱で谷すじのみに侵食作用がみられる地であり、「丘陵地は台地の開析されたもの」とされる。これに対し同書で「母岩・母材の分布」を執筆された佐久間敏雄氏は丘陵・山地の区別を「現行の地形分類で必ずしも明瞭に示されていない。」としつつ「しかし、丘陵には小起伏で谷密度が高い、というイメージがあり、また、樹園地として農業的利用も高いので山地から独立させるのが便利である。ここでは、平地との比高五〇〇メートル以下で高谷密度のものを丘陵として話を進める」と記しておられる。要するに、甚だ不明瞭だと云えよう。
- (27) 『周礼』匠人の「宮隅」について鄭注は「城隅。謂角

『管子』地員篇の山と丘陵地帯

- 浮思也」とするが『經典釈文』はこれを「浮思、並如字。本或作罍思。」とする。宮隅・角浮思とは、王宮の牆の角に設ける小樓——すみやぐら——の如きものと思われるが、それは高く造るもののように、「罍」の動態が「浮」なのであろう。
- (28) 註(21) 前掲書。
- (29) 山東省淄博市臨淄区志編纂委員會編『臨淄区誌』一九八九年。
- (30) 註(10) 前掲『土木地質学入門』
- (31) 藤田崇『地すべり——山地災害の地質学』一九九〇年。
- (32) 王恩田「齊都營丘統考」（註(29) 前掲書所収。）
- (33) 張建華・鄭重華「營丘臨淄一地說質疑」（劉敦愿・逢振鐸主編『東夷古國史研究』第二輯、一九九〇年、所収。）
- (34) 夏名采「營丘初探」（『東学論叢』一九八六年二期）
- (35) 張学海・羅勛章「營丘地望考略」（『中国古都研究』一九八五年 所収。未見。）
- (36) 註(10) 前掲書、三章三・五。佐久間敏雄氏執筆部分。
- (37) 註(6) 前掲書。
- (38) 山西農學院土壤農化專業編『土壤学』上 一九七五年。
- (39) 卷一。一九六九年。
- (40) 山東省地質礦産局区域地質調查隊『山東萊陽盆地地層古生物』（一九九〇年）によれば、山東省の盆地は浅海であつた地域が多く、アルカリ化の危険性は高い。
- (41) なお、陝之芳、即ち河岸段丘、墳衍の如き洪積台地は、当然粘土化しているケースが殆んどで、技術段階によっては、土壤耕性に問題が在つたことも考えうる。

六七（六七）

(42) この点で、間瀬收芳「中国で相いつぐ古銅鉦の発見をめぐって」(『東洋史研究』四九―二)は、極めて示唆に富む。

(43) 一九八八年。